

第1回検討会における課題への対応

平成28年10月18日

国土交通省 四国地方整備局

徳島河川国道事務所

第1回河道管理検討会における課題への対応

【1/2】

番号	課 題	対 応	資料頁
1	<p>【偏流と植生の関係】</p> <p>○偏流の発生と樹林化の関係を示して欲しい。例えば、横断面図、航空写真及び植生図により、植生と地形変化を時間的、空間的に把握することにより、その応答関係を関連づけられるのではないか。</p> <p>○草本類については、調査時期によっては確認できないことがあるので、植生図を作成するときには調査した年月を記入すべきである。</p>	<p>○西原箇所を事例として、樹林化と洪水、地形変化の関係を時間的、空間的に整理し記載したが、明確な要因分析ができるまでには至っていない。今後、砂利採取後と現在の横断面図の比較、縮尺の変更などを行い、より変化が詳しく分かるような整理を試み、第3回検討会に提示したいと考えている。なお、個別事業の実施段階にあたっては、より詳細なデータで分析を行いたいと考えている。</p> <p>○ご指摘のとおり、植生横断面図に調査した年月を記載した。</p>	<p>3-77 ~3-80</p> <p>3-19</p>
2	<p>【偏流の箇所の分類】</p> <p>○偏流について、一般の方が初めて聞いても誤解が生じないような整理をすることが望ましい。このため、60度以上の角度をもって護岸に流れていくような定義ならば、柿原堰、第十堰直下の深掘れについては偏流に定義されるべきではないか。</p>	<p>○偏流による侵食リスクの高い箇所については、河道変遷の整理結果を踏まえ、現象面の抽出プロセスを分かりやすくするため、柿原堰、第十堰直下の深掘れについて、偏流箇所として位置づけるよう変更した。</p>	<p>3-68</p>
3	<p>【レキ河原の保全・再生目標】</p> <p>○整備計画はレキ河原を保全・再生することが河道管理の目標であるため、それに向けて河川環境上の目標と治水対策をいかに調和させるかを考えていかなければならないのではないか。</p>	<p>○レキ河原の保全・再生は侵食対策に寄与すると考えているが、目標の設定等については、治水と河川環境の調和が重要となるため、別途、検討していきたいと考えている。</p>	
4	<p>【河道変遷プロセス】</p> <p>○河道の変遷プロセスが把握できるようフローチャートが必要ではないか。</p>	<p>○河道変遷に影響を及ぼす要因について、自然的・人為的要因が土砂移動特性に及ぼすプロセスをフローチャートとして作成した。</p>	<p>3-2</p>

第1回河道管理検討会における課題への対応

【2/2】

番号	課 題	対 応	資料頁
5	<p>【侵食リスク評価手法及び評価プロセス】</p> <p>○河道特性や被災実績以外にリスクを評価する指標は無いのか。例えば、流路全体の流れを見渡して評価する視点はないのか。</p> <p>○侵食リスクが高い箇所抽出について、そのプロセスをより分かりやすくすべきではないか。</p>	<p>○リスクが高い箇所の抽出においては、河道の変遷や侵食被災事例に基づいた総合的な評価により抽出するが、侵食リスクが高い箇所の評価の設定手法においては、ご指摘を踏まえ護岸などの耐流速と洪水時の流速を比較し、リスクを評価することとした。</p> <p>○近年の洪水による侵食被害の事例を考慮し、洗掘深の程度、みお筋位置及び河床変動の状況を考慮したフロー図に改善した。</p>	<p>3-69</p> <p>3-52 ~3-57</p>
6	<p>【西原箇所の侵食対策効果】</p> <p>○対策効果検証に用いた計算の条件を明確にすること。</p> <p>○対策効果の持続性については、詳細に検討すべきではないか。</p>	<p>○対策効果検証に用いた計算条件について記載した。</p> <p>○対策効果の持続性については、複数洪水により確認した。</p>	<p>3-81 ~3-89</p> <p>3-90 ~3-109</p>
7	<p>【偏流箇所の竹林の地下構造】</p> <p>○西原箇所では、竹林の地下構造が砂地盤となっており、この地下構造が侵食を助長しているのであれば、他の偏流箇所における竹林の地下構造を調査すべきではないか。</p>	<p>○偏流箇所のうち、竹林が繁茂している西原、川島、市場箇所の地下構造を確認し、第3回検討会で報告する。</p>	